

東京湾東岸の大型貝塚の特質

千葉市埋蔵文化財調査センター 西野雅人

本資料は、論題について、加曽利貝塚整備後の大発掘時代の発掘・分析によって何が見えてきたかを中心にとりまとめたものです。準備期間の制約から、議論を経ていない個人的な意見に傾斜せざるを得ず、もとにした資料やデータを十分に提示することはできませんでした。わたしは千葉以外のことをほとんど知らず、学史や研究動向についても理解がきわめて浅いため、独りよがりな考えや適切でない表現が多いことと存じます。今後の委員会で御検討いただくためのたたき台ということで、こうした点を恐れず、失礼を承知で書かせていただきました。どうか御了解をいただき、御指導をよろしくお願いたします。御指摘をいただいたものについて、資料を用意していきます。

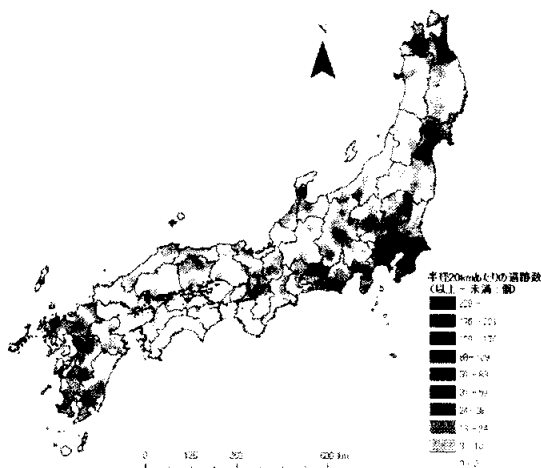
なお、貝層の形態・形成過程は菅谷資料、加曽利貝塚の内容や、この時期の遺構・遺物については総括報告書の項目説明で取り上げます。

1 千葉県の貝塚

(1) 貝塚の発達とその背景

遺跡数自体が多いこと<枝村・熊谷 2009 より>

奈良文化財研究所の全国遺跡データベース（2008）によると、全国の縄文遺跡数は27,563件あり、関東地方は最大の集中域である。このデータをもとにした縄文時代全時期の遺跡密度図（第1図。カーネル密度分布）をみると、関東地方のなかでも下総台地にもっとも濃密であることがわかる（別添1-(1)）。



第1図 縄文遺跡分布（枝村・熊谷 2009）

貝塚の数 日本全国には約 2,700 か所の縄文時代の貝塚があり、その半数が関東地方に集中する。堀越正行による最新の集計によれば、千葉県内の貝塚数は763件で、関東の46.0%、全国の28.4%を占める（別添1-(2)）。貝塚は、ヨーロッパ、北アメリカ、東南アジア、韓国などにも数多くみられるが、規模や分布密度、出土する資料の豊かさなどにおいて、当県のような事例は知られておらず、発掘件数や出土資料の内容を比べれば、さらに突出した存在といえるであろう。

貝塚はどこに多いか 房総半島には東京湾・古鬼怒湾・太平洋という三大水系があり、地形は下総台地と房総丘陵に大きく区分できる（第2図・別添2）。三大水系の分水嶺は、人と動物の共通の主要移動ルートであったと考えられ、下総台地から、日光・足尾山地付近につながる「下野-北総ルート」、房総丘陵につながる「南総-北総ルート」が通じていた（第3図）。貝塚は、奥東京湾を含む東京湾・古鬼怒湾という二つの大きな内海に多く、とくに海水準変動によって各時



第2図 千葉県の地形と縄文時代の貝塚分布



第3図

期に形成された内湾の最奥部に干潟を形成した場所に集中した。前述のように、遺跡自体が下総台地上に多く、丘陵部には少ないが、貝塚は、下総台地のなかでも、谷頭を台地内にもつ傾斜の緩い谷に面した場所に集中している。一方で、数は少ないが、九十九里地域の外洋性の貝塚や、南房総地域の岩礁性の貝塚などもあって、バラエティに富む点も特筆される（別添 1-(3)(4)に県内の水系別、地町村別の集計を示す）。

大型貝塚発達の要因 大型貝塚は、平面形が環状や馬蹄形、双弧状などを呈する大規模な貝層を形成するとともに、堅穴住居跡等の施設が環状構造をもついわゆる環状集落でもある。立地や性格から、当時の海岸線につくられた「加工場型貝塚」に対して、「居住地型貝塚」と呼んでいる（岩瀬 2003）。東京湾東岸に大規模な居住地型貝塚が発達した背景として、環境的な要因を2点挙げるができる。

①採取の容易な内湾干潟産の貝類資源が豊富

②漁場への往復が容易な低平で広大な台地の存在

このうち、①の条件を満たす場所は、ほかに仙台湾、伊勢湾・三河湾、有明海などを挙げることができ、とくに河口干潟が発達した水系に偏在している。内湾のなかでも河川を通じて栄養塩が流れ込み、沿岸流によって流失しにくい河口干潟は資源量が豊富であり、その影響は沿岸の富栄養化が進んだ現在より強かったものと思われる。

②については、東京湾東岸の大型貝塚分布地域には、下総台地内部に水源をもち、段丘面を刻みながら東京

湾に注ぎ込む、河床勾配のきわめて小さい中小河川が発達していた。このような河川は、丘陵部から流下する河川に比べて流量が小さく、流速が遅いため、海岸から集落への移動・運搬コストが相対的に小さかったはずである。一方、東京湾内湾に面した下総台地のなかでも、村田川・養老川・小櫃川・小糸川の本流域は、こうした条件に当てはまらない。こうした場所では、当時の河口付近にのみ貝塚が形成されていて、河川を遡った場所には貝塚が形成されていない（第2図）。

海産資源が日常的に入手でき、居住や森林資源の利用に適した低平な台地が、東京湾沿岸に沿って広域に存在したことが、特異なまでの貝塚発達を可能にした条件であったと推測される。

（2）貝塚研究の動向

貝塚からはじまったもの 貝塚は、考古学の歴史や埋蔵文化財保護の歴史の初期には、古墳とともに遺跡のなかでもとくに重要なものと認識されたが、その後、様々な種類の遺跡の存在が明らかになっていくにつれ、その価値・重要性は相対化されていった。しかし、日本人と遺跡の関わり方の歴史のなかで、貝塚から始まったものが多いことは、今後も変わらない価値をもち続けるであろう。主要なものを3つ取り上げる。

①**巨人伝説と貝塚** 日本人が先住民の存在を意識したことを示す古い証拠として、奈良時代の常陸国風土記の記載、江戸時代の手長明神伝説が知られている。類似の伝承が千葉県内に存在したことは、古くから知られた市原市菊間手永貝塚のほか、千葉市内にも存在したらしい。おゆみ野の太田法師遺跡（字だいだいぶし）の台地上のくぼみが巨人の足あと、六通貝塚や大膳野南貝塚など点する貝塚が、長い手を伸ばして食べてできた貝殻の山とみなされたものであろう。

②**考古学事始め** エドワード・S・モースによる大森貝塚の発掘と学術報告書の出版。

③**近代的な考古学は加曾利貝塚から** 大正13年（1924）の加曾利貝塚の発掘が、層位的な発掘と土器編年研究の大きなきっかけとなった。

貝塚論の系譜 貝塚とはなにか、大型貝塚とはなにか、これまで問われてきた経緯をみていくと（別添 12p.）、日本考古学の歴史の黎明期から、多量の貝殻、とくに粉碎されたイボキサゴに対する疑問とさまざまな解釈が行われている。貝塚の発掘・記載の主目的は遺物の収集や人骨の研究、土器の編年研究などにあり、貝塚自体を中心にしたものは少なかった。多量の貝殻だけでなく、そこが居住地であるとみて人の営みの内

容を初めて検討したのは田沢金吾であり（田沢 1935）、大型貝塚は集落であるという現在につながる考えを提示したのは和島誠一であった（和島 1958）。こうした二つの流れ—多量の貝殻の解釈と集落論を結びつけたのが後藤和民による貝塚・集落論であった。

後藤貝塚論 巨大な貝塚がたくさんでき、あまりも多く多くの貝が消費されたのはなぜか。後に堀越正行によって「干し貝加工場説」と名付けられた後藤貝塚論は、この大きな疑問に対する明快な答えであった。

東京湾東岸における集落の様相をみると、生産形態の発達（食糧供給の安定）・貯蔵形態の発達（計画的、恒常的な食糧の確保）を示す資料と、それを背景とした集落の定着・集中・大型化という現象が同時性をもって現れる。貯蔵形態の発達は、貯蔵施設の発達とともに、保存食糧の存在が不可欠であり、それに干し貝を想定している。遺跡の類型区分を行い、その分布状態から、大型貝塚は、複数の小規模集落が共同で利用した場所とみる点も特徴である。また、保存剤として使われる塩の活用の開始と大型貝塚の消滅の時期が一致することから、製塩の開始が大型貝塚衰退の原因のひとつとなったとする。様々な指標を駆使して集落の様相の変化をとらえ、定着・集中・大型化を示す大型貝塚成立の生産的な基盤を説明したものである。

加曾利貝塚博物館には、その学説とさまざまな実践の成果が常設展示された。後藤説と加曾利貝塚の旧常設展示は、貝塚研究史上のひとつの到達点であり、保存を実現して輝かしい出発を遂げた加曾利貝塚博物館の原点であった。後藤説は、1970年の集落論、1973年の集落内貝塚説・大型貝塚＝干し貝加工場説の発表以来、90年代まで各種文章で繰り返し述べられ、また、歴史教科書をはじめ多くの書籍に取り上げられることによって広まり、縄文時代のイメージ形成に影響を与えてきた。

加曾利貝塚の保存運動を支え、貝塚の魅力を広く伝えたことは、きわめて多大な功績といえる。加曾利貝塚博物館の常設展示は、その学説を遺跡自体と具体的な資料から知ることができる点が大きな特色であり、魅力であった。一方で、学説自体には疑問をもつ関係者が多かったにも関わらず、長い間検証や見直しが行われてこなかった。

大型貝塚の大発掘 その間、千葉県内では大型貝塚の発掘が相次いで行われた。大型貝塚をまるごと発掘して、膨大な出土品を整理して報告書を作るといったことは、それ以前には一例もなく、今後もそれほどはないはずである。千葉県の貝塚は、単に数が多いだけでなく、発掘例が多いことが特徴といえる。

大型貝塚の全体像を知り得る発掘・報告例は全国で8遺跡あり、いずれも京葉地区のニュータウン造成に伴うものである。

おゆみ野：有吉北、木戸作、小金沢、大膳野南

ちはら台：草刈

国分寺台：西広、祇園原、上小

このほか、貝塚以外の大集落の全体像を知り得る発掘例も多く、大規模集落の実態を解明するための材料が豊富である。こうした”大発掘の時代”を超えて、かつて後藤が立論の根拠を提示した当時とは、資料・情報の量は雲泥の差がある。

数多くの発掘によって得られた新たな知見はあまり活かされずにきてしまった。とくに、縄文集落や土器研究、史跡や発掘成果の活用の動向から、千葉県は取り残されている。

（3）大型貝塚の形成年代

時期区分 第1表は、千葉県史（西野 2004）で提示した区分案を一部追加・訂正したものである。8期区分の妥当性や、動向の説明が適切であるかどうか、十分な議論を経ていない。当地域の縄文時代時期区分案としては、ほかに市川市史（1971）が知られており、後藤和民は、千葉市史（1974）以来、縄文時代5期区分を使って貝塚・集落の変遷を検討・説明した。市川市史と千葉市史に共通するのは、両市が東京湾水系にあることもあって、おもに東京湾東岸の貝塚の発展—消滅を軸としていることである。私案も含めて共通するのは、中期大型貝塚の成立以前と以後に大きな画期をおく点である。前期の集落や、古鬼怒湾湾口部の中期初頭から前葉の大型貝塚の評価が問題となるが、県内の資料をもとにすると、そこに大きな画期を見出すのは難しく、それが地域的な特徴であると思われる。私案が市川市史・千葉市史と異なる点は、大型貝塚の形成が、ここでいうIV期（中期中葉）と、VI期からVII期（後期前葉から晩期前半）の二時期に分かれており、旧来発展期・最盛期とされたなかに大型貝塚が形成されない時期（V期）を挟むことを明示した点にある。中期と後期の大型貝塚が連続しておらず、貝層形成の凋落期があったことは古くから指摘されていた（堀越 1972）が、大きな画期が加曾利 E 式期のうちにあったことによって、土器編年が定着をみない影響を受けた。

この問題を大きく進展させたのは、加納実による加曾利 E III 式占段階に現れる土器群の明示と、中期拠点集落消滅期の研究であった（加納 1989・1994・1995・2000。資料）。中期大型貝塚の形成期は、吉井城山編年（岡本・戸沢 1965）の加曾利 E II 式までであり、加

第1表

千葉県 縄文時代時期区分案

時期区分	土器型式	大きな変化・画期	遺構・遺物の特徴	貝塚の特徴	市川市史	千葉市史
草創期	+	一 住居なし	溝型陥し穴盛行?	なし		
早期	前葉 a 燃系文	I 期 竪穴住居現れる	古鬼怒湾・九十九里分水嶺に包含層多。養老・小櫃川も	貝塚の出現もごく数例	形成期	生成期(前半)
	中葉 b 沈線文				(停滞期)	
	後葉 糸痕文	II 期 炉穴群多数、住居少数	下総台地広域の台地上に炉穴群多、住居少。現東京湾沿岸への進出	小規模な集落に貝層多数形成。低地貝層出現	上昇期	
前期	初頭 a 花横下層	III 期 竪穴住居一般化 広場集落出現 包含層のみの遺跡多数	奥東京湾・古鬼怒湾に小集落点在 古鬼怒湾・現東京湾に拡大	特定集落に貝層、骨を含む 小規模な集落に貝層形成。奥東京湾水系に中心	展開期・前半	生成期(後半)
	前葉 b 罫山				展開期・後半	
	中葉 c 黒浜					
	後葉 d 諸磯・浮島					
中期	初頭 e 五輪台	IV 期 過半数定住型・集中居住型集落が長期継続	奥東京湾・古鬼怒湾に多数の住居と貯蔵穴	集落減少、低地に包含層多 古鬼怒湾湾口部に大型貝塚 古鬼怒湾に大規模貝塚	(停滞期)	縄文期(前半)
	前葉 f 阿玉台 I・II					
	中葉 a 阿玉台 III・中峠					
	中葉 b 加曾利 E I・II					
	後葉 a 加曾利 E III・IV					
後期	初頭 b 称名寺	V 期 広場集落消滅 分散居住が一般化	住居分散。古鬼怒湾沿岸は非貝塚集落形成 小集落点在、一部後期の広場集落開始	小規模な集落に貝層形成	縄文期	縄文期(後半・終焉期)
	前葉 a 堀之内	VI 期 過半数定住型・集中居住型集落が長期継続	広場集落に特殊型貝層、多数の住居	大規模貝層・小貝層多		
	中葉 b 加曾利 B1	VII 期 広場集落消滅するが一部が縮小化	住居のや中央部みなどの土木工事盛。住居は壊出しにく	大規模貝塚の一部のみ継続。貝層形成は不活発化、取骨増える	退嬰期	
	後葉 a 加曾利 B2・3					
晩期	前葉 b 後期安行	VIII 期 ごく一部で集落群 他は包含層のみ	遺構検出例ごく少ない	ほとんどなし	退嬰期	消滅期
	後葉 c 晩期安行					
晩期	後半 千網・荒海					

納編年の加曾利 E III式成立期がその消滅とほぼ一致する。発掘事例の増加により、中期大型貝塚の成立と消滅はほぼ同時であることは確実となった。阿玉台 III式期から加曾利 E II式末に相当し、その時期を「中期中葉」と呼んでいる。それ以前の阿玉台式前半期までを中期前葉、加曾利 E 式後半を中期後葉とする。

東京湾東岸の大型貝塚の特質をみる上で、中期大型貝塚の消滅の実態と、その後成立した後晩期大型貝塚が中期のそれとどう違うかが重要なポイントとなる。

加曾利貝塚の形成年代 加曾利貝塚には、旧石器時代、縄文時代草創期、早期後葉から前期 (III期) にも、活動の痕跡があるが、大規模な集落を形成したのは、中期中葉 (IV期) のことで、それから晩期中ごろ (VII期) まで、2度の大きな社会の再編を超えて、約2,000年の間、居住域であり続けた。

2 大型貝塚成立以前の動向

詳細と図面は別添3に示す。

(1) I期・早期前葉から中葉

早期前葉・中葉の初期貝塚は、海産資源利用の開始を示す重要なものであるが、遺跡の分布は、旧石器時代以来の中心である、古鬼怒湾水系と九十九里水系の谷の分水嶺付近に集中する (別添 3p)。海産資源利用の開始を早期前葉に一般化し、ひいては定住の起源などに結び付けるのは拡大解釈といえるのではない。

下総台地上の発掘で年々検出例が増え続ける溝型陥し穴は、シカ猟専用の罫とみられ、縄文草創期～早期前葉に盛行したことがわかってきた (中村 2008)。このことは、縄文時代の初期、下総台地が一大狩猟場であったことをものがたる。海産資源の利用は、にわかには広まることはなく、この時期の生産活動は旧石器時代以来の狩猟に傾斜したものであったのではない。

海産資源の利用が低調であった理由 海進初期の内海は、谷が深く入り込んだ水深のあるものであり、また変動もあって干潟があまり発達しなかったとみられ

る。相対的に貝類資源は少なく、利用しにくいものであった可能性が高い（西野 2009）。

（2）Ⅱ期・早期後葉

早期後葉に様相は大きく変化する。遺跡の分布は明らかに拡大し、印旛沼周辺と東京湾沿岸を中心として沿岸部への展開が特徴的に見られる。貝塚例も急増し、貝類の食糧化が一般化したことを示す。また、植物質食材の加工用石器の増加や、貯蔵穴の可能性のある土坑の出現など、植物食の拡大も顕在化している。

かかる現象は、縄文人の生産・居住様式の変遷と、貝塚形成史における画期を成すものといえる。アクセス容易な干潟の拡大と落葉広葉樹中心の豊かな森林の形成は、縄文人と海の関係、および土地利用の仕方に強い影響を与えたものと考えられる。一方、狩猟も盛んに行われていたらしい。石鏃やその製作跡が目立つからである。飛ノ台貝塚、天神台遺跡、鳥喰台遺跡群という大規模な集落にも、炉穴のおびただしい重複があり、頻繁な移動・回帰が想定されている。

（3）県南地域の早期の動向

養老川河口・小櫃川河口付近の台地上にも、早期の遺跡が濃密に分布し（田中 2015）、大規模な炉穴群も形成されている。炉穴や貝層は早期中葉・子母口式に遡る。

（4）Ⅲ期：前期から中期前葉

前期（Ⅲa～Ⅲd 期） 集落・貝塚の分布は県北西部に圧倒的な集中があり、奥東京湾を囲むように存在した広域遺跡群の一部といえる。

前期初頭：大きな水系に1つないし2つの拠点集落を形成。「特定集落への求心的、集約的な居住形態」（小川 2001）が想定できる。幸田貝塚、二ツ木向台遺跡が代表である。

前期前葉：西岸では小規模な集落が増加するが、下総台地では幸田貝塚の拠点的な性格が強まる。

前期中葉：西岸の貝塚群は分布がやや拡大し密度も濃くなる。下総台地は分布域が大きく広がり、4つのまとまりを形成する。遺構内貝層を形成する例が多いため、貝塚分布は稠密となる。住居が数軒から数十軒という集落が数多く、広場をもつ例もある。

前期後葉～末葉：集落は減少に転じ、とくに東岸の湾奥に顕著。湾口部の谷には貝塚が残る。海退の影響による退潮傾向と海側へのシフトであろう。なお、現在、千葉県教育振興財団で実施している柏市・柏たなか駅周辺の広域の発掘調査では、早期後葉から前期後葉まで連続と広がる県内最大規模の集落群を調査・整理中である。

現東京湾域の動向 中期に大型貝塚群を形成する都

川以南に前期貝塚の形成が低調である理由は、地形の変化（未提示）をみると頷けるところである。海進初期には、この地域には現在よりもかなり沖側に台地がせり出していたのであり、現在の村田川～小櫃川河口付近の台地は、海岸線から遠く離れていた。侵食されて失われた台地に貝塚が存在した可能性は否定できないが、干潟の発達には湾奥に比べてもさらに遅れたことが想定されることから、この時期の水産資源の活発な利用を見込むことはできない。

中期初頭～前葉（Ⅲe 期） 奥東京湾沿岸に圧倒的に集落・貝塚の分布が集中していた前期後葉までとは異なり、古鬼怒湾水系にも中心が形成された。現在の利根川下流域や霞ヶ浦周辺、県内では小野川・黒部川水系に大型貝塚群を形成し、一部はⅣ期まで継続する。

（5）Ⅲ期の生産・居住様式

前期初頭・前葉の大規模集落 前期最大の集落である幸田貝塚は、環状構造をもつ多くの住居跡を検出し、遺構内貝層 70 か所と、大きな面状貝層をもつ。面状貝層からはイノシシ・シカや、マダイを中心とした大形魚の遺体が多数出土している。この時期の集落のなかでは、貝層の規模や大型獣・魚骨の出土量が突出している。また、磨石類が比較的多く、植物食も一定の割合を占めていたと推定される。このような傾向は、Ⅳ期（中期中葉）の大型貝塚形成期のあり方に近い。

一方で住居跡に建て替えや規模の変更が多いこと、廃絶後の堅穴を埋め戻さず、床面に直接貝層を形成する例が多いことなど明瞭な違いもみられる。定住的な要素と、頻繁な移動・回帰を想起させる要素を併せもつといえる。小川岳人はこれらの現象について、世帯規模と構成の多様性が反復した住居の上に体现されたものと理解すべきとし、反復の期間が長期から短期まで、様々であることから、居住集団の移動性の高さと構成の不安定さを示すと考えた。生業活動については、相当柔軟性に富んだフレキシブルなものであった可能性が高いとし、おもに堅果類の豊凶にあわせて集団規模を調節し、その構成員を再配置（拡散あるいは集中）したと考えた（小川 2001）。

中期初頭・前葉の大型貝塚 黒部川水系の大型貝塚は、大規模な斜面貝層の調査が行われ、貝類採取と魚類の網漁・刺突漁が盛んに行われたことが判明している。海産資源の活発な利用は、Ⅳ期の東京湾沿岸の大型貝塚群に引き継がれる。ただし、台地上に環状構造の遺構群が存在した可能性は低く（台地上の調査例が乏しいが、トレンチ調査が行われた白井大宮台貝塚では、Ⅳ期の小堅穴が検出されたものの、Ⅲ期の遺構は皆無であった）、石器がきわめて乏しいなど、生産活

動も大きく異なっていた可能性が高い。

(6) 中期前葉の動向

中期前葉(阿玉台式・勝坂式前半)には、関東広域に人口が集中し、地域により生産様式が大きく異なっていた。中期中葉に大型貝塚形成の中心となった都川・村田川低地付近には、この時期の集落が乏しく、あっても内陸寄り、中葉に大型貝塚を形成する母体を県内に見出すことはできない。

中期大型貝塚には、この時期に関東各地で発達した多様な生産・居住様式が導入されている。西関東の深い堅穴・打製石斧を用いた根茎類の利用、北関東の群集貯蔵穴を利用した堅果類の計画的な利用、古鬼怒湾湾口部の貝類の活発な利用、土器片錘・貝刃の利用などである。在地の内陸集落または九十九里側の集落から受け継いだのは神津島産黒曜石と活発な狩猟である。

3 中期大型貝塚

(1) 成立期の様相

中期中葉、東京湾東岸の沿岸地帯に大型貝塚を核とする集落群が40数か所以上現れ、大きく二大群を形成した。その一方の都川・村田川沿岸域の中期拠点集落群は、集落の乏しい地域に突然出現したといえる。中期前葉に散見する集落は比較的谷奥にあつて海産資源の利用は乏しい。むしろ黒曜石の石鏃製作が活発に行われているなど、狩猟に傾斜し、遊動的な生産・居住様式が想定される。したがって、沿岸地域に突然出現した大型貝塚は、新たに移り住んだ集団が形成したと考えざるを得ない。この点は古くから想定されていた(後藤 1970)。

直前期の集落 やや地域を広げてみても少なく、調査例には四街道市南作遺跡と千葉市城の腰遺跡がある。いずれも遺構群の環状構造などはすでに採用されており、先駆的な集落として注目される(小林 2006)・小倉 2011)。しかし、いずれも中期拠点集落群成立期前後に消滅してしまう。これらの集落の構成員が拠点集落群の成立に関わった可能性はきわめて高いが、直接母胎となった集落は今のところ見当たらない。

奥東京湾湾口部の場合、阿玉台Ⅲ式期あるいはそれ以前から継続する集落が少なからず存在したが、直接母胎となった集落が存在したかといえ、現在のところ明確な事例は知られていない。例えば松戸市八ヶ崎遺跡は阿玉台式前半期を主体とする集落であり、加曾利E式前半期の遺構も存在するほか、その後も後期前葉まで継続している。ただし、勝坂式末期から加曾利E式前半期の遺構は少なく(峰村 2008b)、中期大

型貝塚に含めてよいか、明確でない。

県内の他地域 ①黒部川低地貝塚群、②長沼低地貝塚群、③栗山川低地貝塚群、④南白亀川低地集落群には、阿玉台式前半から集落が分布する。とくに古鬼怒湾水系の黒部川低地から長沼低地にかけては、香取市阿玉台貝塚・白井大宮台貝塚に代表される大規模な貝塚が中期初頭から存在する点で注目される。貝層の内容は東京湾沿岸の中期中葉の大型貝塚との共通点も多い。しかし、この地域の大型貝塚については、集落構造がほとんど不明な状況にある。台地上の確認調査を行った白井大宮台貝塚では、数少ない遺構は中期中葉でも後半期のものであった。一方、遺構分布に環状構造が認められる佐原市磯花遺跡西側集落や、成田市稲荷山遺跡・久井崎Ⅱ遺跡、神崎町原山遺跡では、集落の形成が中期前葉に遡ることはなく、貝層の形成は低調である。これらの集落は、東京湾沿岸の大型貝塚の影響を受けて成立したとみるべきであろう。

つまり、二大貝塚群を形成した地域にも、県内広域で見ても、中期拠点集落群の直接母胎となった集落の候補は現在のところ一つとして挙げることができない。大半の拠点集落がほぼ一斉に新たに形成された蓋然性は高く、その形成には二大群の地域を超える広域の集落が関わった可能性が高い。

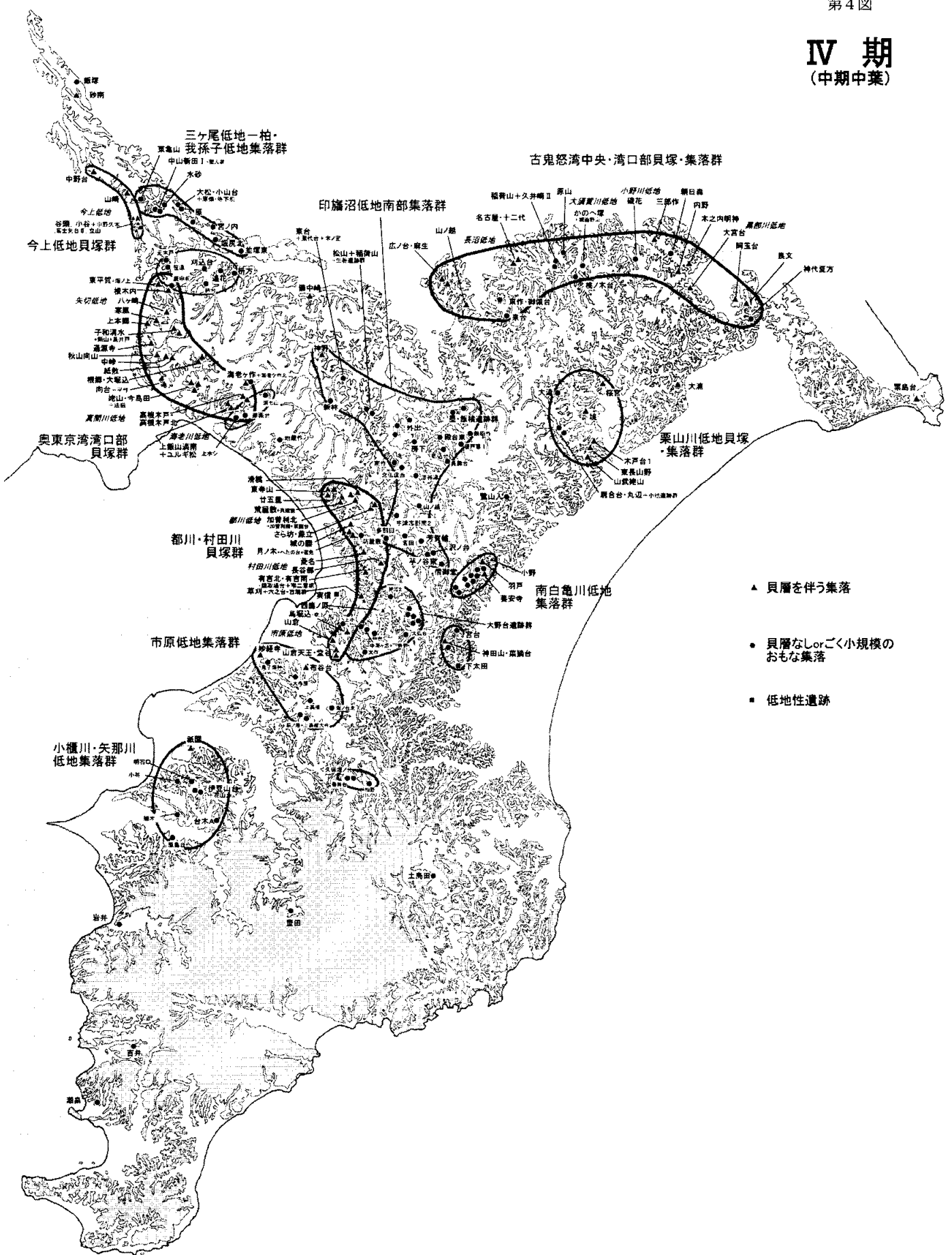
(2) 中期大型貝塚群の分布構造

東京湾東岸の集落の分布構造(西野 2001・2005)を資料により説明したい。

広域集落群 大型貝塚が東京湾沿岸の二か所に大きなまとまりを形成しており、「奥東京湾湾口部貝塚群」、「都川・村田川貝塚群」と呼んでいる(第4図)。東京湾の最奥部に生産性の高い河口干潟が発達した地域にあたり、二つの地域の間の河口干潟が発達しなかった部分には、集落の明確な空白地帯が存在した。一方、奥東京湾湾口部貝塚群の北側(今上低地付近)、都川・村田川貝塚群の南側(養老川低地左岸・小櫃川・矢那川低地付近)には、少数ながら大規模貝層を伴う拠点集落が分布している。

小単位集落群 第5図は、都川・村田川集落群に属する有吉北貝塚周辺の中期中葉の集落分布を示している。この地域は千葉東南部ニュータウン(おゆみ野)の区画整理事業に伴い広大な面積を対象に密度の濃い発掘調査が行われた範囲にあたる。台地上のかなりの部分が調査されており、集落や包含層の有無が広域にわたって判断できる点で集落研究に有利な条件を備えている。これまで、整理作業の進捗により図上の点を追加してきた(西野 2001・2005)が、事業終了により、

IV 期 (中期中葉)



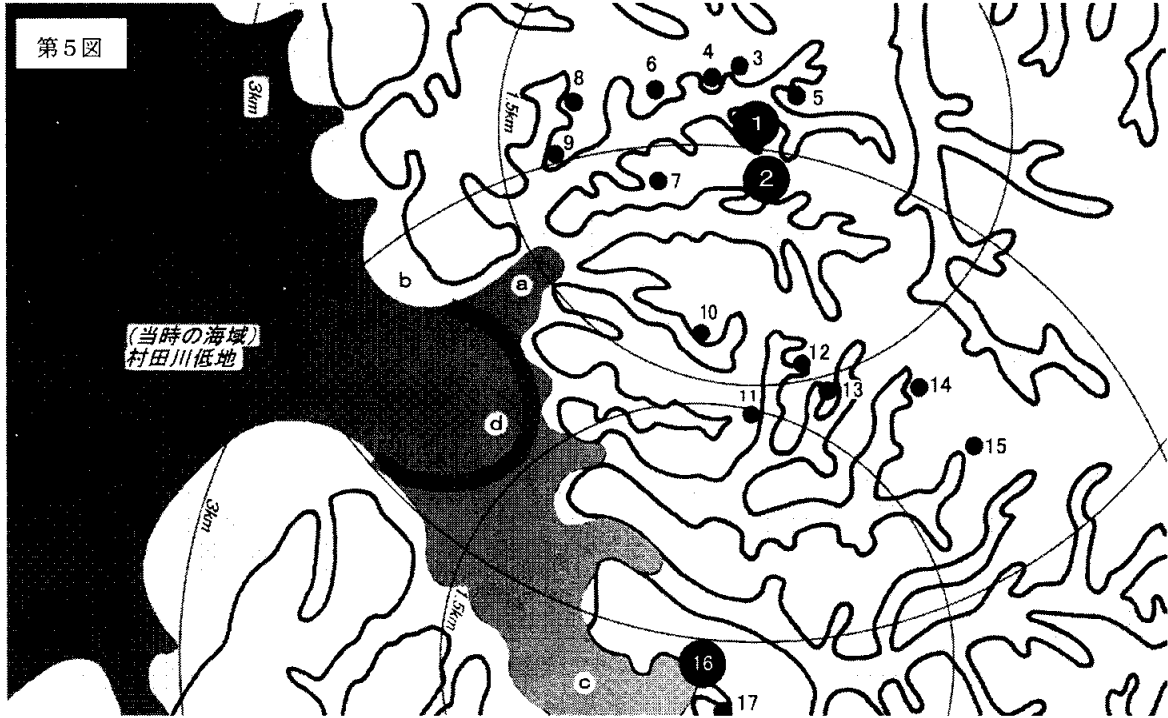
- ▲ 貝層を伴う集落
- 貝層なしorごく小規模のおもな集落
- 低地性遺跡

この図が当面最終的なものといえる。ドットはこの時期の住居跡が検出された遺跡、すなわち集落遺跡を示している。なお、薄い網は谷を濃い網はこのころの海域を示す。

小単位集落群内部の集落は、拠点集落付近の遺構がまとまっている部分（中心集落群）と、その周辺のほぼ単独で遺構が存在する部分（周辺集落群）からなり、

その周囲に集落の空白地帯を形成している。同様のあり方は、草刈貝塚（15）と周辺遺跡群（16+図外の2遺跡）にもみられる。

中心集落群 阿玉台式後半ないし中峠期にいち早く有吉北貝塚に拠点集落が成立する。少し遅れて加曾利E I 式期に有吉南貝塚にも集落を形成し、加曾利E II 式末ないしIII式初頭まで拠点集落が二つ並存



A: 有吉北+有吉南貝塚と周辺集落群 1.有吉北貝塚 2.有吉南貝塚 3.鎌取場台 4.南二重堀 5.鎌取 6.高沢 7.有吉城跡 8.有吉 9.上赤塚
 B: 草刈貝塚と周辺集落群 16.草刈貝塚 17.草刈六之台（草刈古墳群、川焼台=図外）
 C: 中間域集落群 10.椎名崎古墳群 11.神明社裏 12.小金沢古墳群 13.御塚台 14.六通金山 15.大膳野北
 a~d: 想定される主な漁場と海浜部生産地 a.大百池付近 b.浜野川神門付近 c.草刈貝塚下 d.イボキサゴ漁最適地

第2表 有吉北貝塚周辺の小単位集落群・中間域集落 太枠線は拠点集落形成期

No.	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		13		14		15		住居跡合計		
	有吉北貝塚	有吉南貝塚	鎌取場台	南二重堀	鎌取	高沢	有吉城跡	有吉	上赤塚	椎名崎古墳B	神明社裏	小金沢古墳	御塚台	六通金山	大膳野北	住居	小堅	住居	小堅	住居	小堅	住居	小堅	住居	小堅	住居	小堅	住居	小堅				
阿玉台・中峠	17	58																												88			
阿玉台~E I	20	34																												65			
加曾利E I	37	129																												187			
E I ~ II	11	79																												127			
加曾利E II	43	217																												299			
中期中業計	128	517																												873			
調査範囲	3/4調査	一部調査	一部調査	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面	全面				
遺跡群の分類	中心遺跡群				周辺遺跡群									中間域遺跡																			
	小単位遺跡群																																
加曾利E III参考	3	2	6	6					7												3						5	4	36				

した。有吉北貝塚の対岸には加曾利 E I 式期に鎌取場台遺跡 (3)、E II 式期に南二重堀遺跡 (4) に集落を形成する。住居跡と小竪穴の数はかなり多いものの、最初から台地の中心付近に遺構が分布することから、拠点集落の遺構分布とは一線を画し、集落形成期間も短い。有吉北貝塚と有吉南貝塚の中期拠点集落の外に分布する遺構も、同様の性格であった可能性がある。

周辺集落群 中心集落群の周囲には、住居跡が少数発見される遺跡が点在する (6~9)。中心遺跡群に近い遺跡ほど住居跡が多い傾向がみられる。

中間域集落 2つの小単位集落群の間に境界が存在したことを思わせるのが、10~15の遺跡である。これらの遺跡からは住居跡が1~数軒見ついている。各支谷の最奥部にあたることも土地選択の理由に含まれる可能性が高いが、有吉北貝塚、草刈貝塚を中心とした小単位集落群のちょうど中間付近に帯状に分布しているのは、偶然とは考えられない。何らかの領域が存在したことを暗示している。このような小単位集落群・拠点集落との位置関係から、中間域集落と呼ぶ。9~12・14は最後の報告書を刊行した時に追加したもののだが、9は小単位集落群の、10~12・14は中間域集落の分布傾向を強く支持する結果となった。

分布構造の特徴 以上のように、①集落 (拠点集落と小規模集落あり) - ②小単位集落群 (拠点集落1つないし2つ+いくつかの小規模集落がまとまりを形成) - ③広域集落群という、重層構造を捉えることができた。今のところ、小単位集落群内の分布構造が明らかにされている例はほかにはないが、広域の分布 (第4図) をみる限りにおいても、拠点集落1~2か所と小規模集落がまとまりをつくり、周囲に空白地帯をもつという構造は、都川・村田川貝塚群と奥東京湾湾口部貝塚群という二つの広域集落群内に一般化でき、大型貝塚群形成期を通じて維持されたことはほぼ確実である。集落間の強固な了解関係が存在したのだろう。

(3) 中期集落群の資料的な特質

作業仮設や恣意的な線引きではなく、集落の単位や領域が、分布のまとまりと空白によって把握できること、二つの広域集落群も輪郭が明確であって、その内部に存在する単位集落群の数もほぼ把握できている点は特筆すべきであろう。人口構造や動態を検討する上で、ほかにはない条件が揃っているものと思われる。

拠点集落の分割とその意味 有吉北貝塚と有吉南貝塚では、成立時期に差が認められるとした。詳細は省くが、有吉南貝塚は、当初鎌取場台遺跡のような中心

集落群を構成する小規模集落であった可能性が高い。加曾利 E I 式期に拠点集落となり、その後二つの拠点が並存したと考えられる。第2表を見ると、有吉北貝塚において加曾利 E I 式期に住居跡が増加しており、人口の増加が集落の分割を引き起こした可能性がある。後述のように、各拠点集落の様相は様々な点で等質的であり、推定される1集落全体・全時期の遺構数は、住居跡200~300軒程度、小竪穴1000基程度を大きく逸脱する例は見当たらない。もし、拠点集落の分割が行われなければ、倍の規模の集落が存在してもよいが、一つとして見当たらないのは、等質性を保つ何らかの意味があったためではないか。

後藤集落論との関係 この時期の遺跡群は、拠点集落が一つないし二つあって、その周辺にのみ小規模な集落が点在して遺跡群を形成するのが特徴である。これは、後藤和民が大型貝塚論で使用した、大型貝塚の周囲に多数の小規模集落や包含層が分布するという説明とは大きく異なっている。加曾利 E 式期は、IV期とV期という居住様式の全く異なる時期に跨っており、両者を一括した分布図や説明によって誤解を生んできたといえる。第2表のように、住居跡の大半は拠点集落に存在したと考えられ、中期大型貝塚は居住の拠点であって、多くの集落の共同作業の場とか、干し貝加工に特化した場所という見方は合わない。

(4) 通年定住型の居住様式

通年定住を示す要素 このあと中期大型貝塚の代表として取り上げる千葉市有吉北貝塚の分析結果から、複数の世帯が集まり、長期間継続的に居住したものとみられる。

集落の形成期間 中期中葉の阿玉台 III 式から加曾利 E II 式の末まで。土器の細分型式に間隙は認められない。各型式に伴う遺構は相当数存在し、夥しく重複しており、集落が途中で途切れた様子はいくつか見えない。

集落構造の計画性 中央に広場的な空間をもつ。貯蔵穴の分布が結果として環状を呈すること、斜面と遺構群の外縁部を廃棄帯とすること。広場には遺構が皆無であることから、集落デザインの企画性や計画性は一貫していたといえる。

多季節性 ハマグリの貝殻成長線分析により、貝漁は一年中行われたことがわかっている。

片付け 石鏃と土器片錘の製作が盛んに行われたとみられるが、徹底して片付けているらしく、環状集落内には製作痕跡を残さない。廃絶住居や小竪穴を放置せず埋め戻すため貝層が床面に接した例がみられない。

(5) 斉一性の高い生産・居住様式と社会関係

出土する遺物の種類や数、割合に至るまでの集落もとてもよく似ている点が大きな特徴である。二大群の内部で数軒の住居跡を掘れば、土器以外に土器片錘や神津島産の黒曜石が出土し、石鎌：打製石斧：磨石類が1：1：1に近い割合で出土する。貝層を掘れば、獣骨と魚骨がある程度混じり、魚種組成もほぼ同様である。このような状況から、安定的・長期継続的な生産・居住様式をもった独立性の高い集落が、等質的に分布していた状況を想定することができる。

拠点集落形成期には神津島産の黒曜石が県内全体を席卷する。前後の時期をみると、前期末～中期初頭には相模・伊豆方面に、阿玉台式前半期（大型貝塚形成期より以前）には千葉県内に大量の神津島産黒曜石が持ち込まれており、その傾向は拠点集落の終末期まで継続し、その後は神津島産を補完するように信州産が主体を占めるようになる（加藤他 1996、建石・津村 2003、池谷 2005）。地域内での集落間の差や、一集落での時期差はほとんどみられない。こうした黒曜石流通の傾向は、拠点集落形成期における広域の集落間の関係を示唆している。

(6) 周辺の集落群との関係（第4図参照）

A 貝塚を伴う集落群

中期中葉の大型貝塚は、大半が二大貝塚群に集中し、そこでは拠点集落のすべてが貝層を形成していた。下総台地上には、河口干潟を形成した三大水系の各地に貝塚が形成されている。河口干潟に近い拠点集落では貝層を形成し、やや離れた貝層を形成しない拠点集落とともに一群を形成するのが特徴である。

古鬼怒湾湾口部 前述のように中期初頭から前葉に大型貝塚群を形成しており、竪穴住居や炉、石器を伴わない独自の文化を形成した。中葉・加曾利 E I 式期に、環状構造をもつ集落が形成されるのは、東京湾沿岸地域の影響を受けたものであろう。広い河口干潟を形成した長沼低地・黒部川低地周辺では貝層を形成し、その中間の大須賀川・小野川低地周辺では形成しない。

今上低地貝塚群 中野台貝塚・山崎貝塚・中野久木谷頭遺跡の3つの大型貝塚と貝層規模が未明な拠点集落・小谷貝塚があり、南端の中野久木谷頭・小谷貝塚を中心とした集落群は、二大群の様相に近い。

市原低地集落群 貝層の規模が不明確な布谷台貝塚と、貝層を形成しない集落が緩やかな群を形成する。

小櫃川・矢那川低地集落群 南端の中期大型貝塚である祇園貝塚と、いくつかの貝層を形成しない集落が緩やかな群を形成する。

南白亀川低地集落群 二つの拠点集落（羽戸・小野）と、分水嶺に沿って広がる小規模集落の存在が知られていた。近年養安寺遺跡が調査され、整理作業中である。集団猟や、骨・皮素材等の生産・分配に関わる集落であった可能性がある。当集落群は、三大水系の分水嶺が交わる地点に近く、房総丘陵の北端に位置する。細長く続く急峻な分水嶺は、シカ・イノシシの移動ルートを限定する役割を果たした可能性がある。また、下総台地がもっとも括れて東京湾沿岸まで平坦なルートで結ばれており、神津島産黒曜石、銚子産琥珀、軽石、軟砂岩などが九十九里海岸を経て、また当地で入手した骨・角・皮革等が東京湾側に流通していた可能性がある（別添 7p. 図）。

B 貝塚を伴わない内陸部の集落群

中期大型貝塚形成期に、印旛沼南部や、千葉・市原市の内陸域に貝層を形成しない集落群が存在することは知られていたが、その分布を明確に把握できるようになったのは、やはり加曾利 E 式の前半・後半の区分が確定して後のことである。下総台地上の各地の貝塚集落に近接して、貝層を形成しない集落群が形成されているのである。このうち、県北西部の集落群の存在が明らかになってきたのは、ごく近年のことである。

印旛沼低地南部集落群 南側で都川・村田川貝塚群、南白亀川低地集落群と、北東で古鬼怒湾中央・湾口部貝塚・集落群、栗山川低地貝塚・集落群と、北西で奥東京湾湾口部貝塚群、三ヶ尾低地集落群と連絡して、要の位置にあるといえる。多くは拠点集落とみられ、とくに隣接する集落群との接触部に重要な遺跡や、集落の集中が目立つ。

千葉地土気地区・市原市の北東部 村田川上流・中流域にあたる。都川―村田川貝塚群で大型貝塚が消滅する時期を挟んだところの、加曾利 E II 式と E III 式に跨る小規模な集落が多いことが特徴といえる。

三ヶ尾低地―柏低地集落群 古鬼怒湾水系に面する当集落群は、今上低地貝塚群の大型貝塚にごく近接しているにも関わらず、わずかな例外を除いて基本的に貝層を形成しない。山崎貝塚と東亀山遺跡は、ひとつの集落群に括ることも可能なほど近接しているが、山崎貝塚には貝殻付きの貝が多量に運び込まれたのに、分水嶺を超えた東亀山遺跡にはほとんど持ち込まれなかった。

手賀沼低地奥部 旧沼南町も含めた柏市、我孫子市で報告や新たな調査が相次いでおり、三ヶ尾低地―柏低地集落群と呼んできたまとまりが手賀沼の北岸まで延び、南岸にも集落が存在して奥東京湾湾奥部貝塚群の北端部に接する集落群を形成することが明らかにな

った。柏市小山台遺跡・大松遺跡を中心とした集落群は、環状集落2つに隣接して環状構造をもたず連綿と広域に遺構が広がるようである。現在発掘・整理中であるが、この時期としては県内最大規模の集落群となる可能性が高い。

(7) 男性リーダーの存在と消滅

独立性の高い斉一的な単位集落群が集中して広域群を形成する範囲において、特徴的な骨角貝製品が使われた。埋葬遺体の腰部に装着した状態で出土する事例の存在から「腰飾」とされるものであり、埋葬人骨の着装例は判明の限り高年齢の男性に限られる。尖頭篋状の鯨類下顎骨製品、環状のイモガイ製品、叉状の鹿角製品の大別3種類がある。盛行年代は中期拠点集落の成立期に限られ、後期以降に盛行をみる腰飾の最古の部類となる。

以上の諸点から、3種の腰飾は、中期拠点集落群成立期に存在した男性リーダーの佩用品であったと考えられる。広域で社会の再編が起きた時期に、拠点集落は複数の集団の統合によって、拠点集落群は集落間の強い連携によって成立し、継続し得たと考えられる。それを実現したリーダーたちが、共通の表徴を身につけたのではないかと推定される。素材と形状の異なる3種の腰飾は、いずれも勝坂式土器の蛇体文に対比することができ、その意匠はヘビを表徴するものであったと考えている。西関東に分布の中心をもつ勝坂式土器の意匠が、東京湾東岸の拠点集落のリーダーのシンボルとして採用されたという見方である。

西関東の影響 拠点集落群成立以前、県内にその母体となった集落は見当たらず、成立当初は、関東広域の土器が混在して使われていた。人口の集中する中心地でありながら独自の土器をもたないことを特徴としていたのである。さらに、阿玉台式前半期と拠点集落形成期の集落の様相はまったく異なっており、大きな断絶が想定できる。さまざまな点から、東京湾東岸の中期拠点集落群の形成には関東広域の集団が関わった可能性が高い。腰飾の意匠は、西関東の集団が深く関わったことを示唆するものである。

堀越正行は、すでに30年も前にこのことを指摘しており、東京都大田区千鳥久保遺跡の男性人骨に装着されていた「鳥嘴形角器」から想定される他界観に直接の系譜を認めている(堀越1971・1972。別添)。東京湾東岸の拠点集落自体から出土した明らかに勝坂式の系譜をもつ腰飾は、さらに具体的かつ直接的にこうした考えを指示するものといえる。

「階層化」の議論 ただし、リーダーの存在は「階

層化」の議論には直接つながらない。中期中葉における東京湾東岸の採集・狩猟民のすがたは、高い人口密度を維持しえた高度な生産・社会システムが想起され、階層化社会を想定する論者にとって都合のよい内容を含んでいる。しかし、これまでの検討結果からみて、中期中葉の生産・居住様式は、階層化とは別の方向に特化した可能性が高い。定住化によって現れるとされる要素のうち、祭祀の発達・工芸の特殊化・特別な個人や世帯の存在などが発達しない方向に進んでいる。

大型石棒 関東広域で中期中葉の加曾利E式前半期に急増する(成田・中村2011)。東京湾東岸はほとんど受容しなかったが、少数ながら出土例が注意されるようになってきた(田中2004)。有吉北貝塚(小笠原他1999)や草刈貝塚[註11]の事例をみると、集落前半期の遺構に輪切り状の破片が廃棄されており、導入されたが早晚排除されたとみるべきであろう。

リーダーの存在も石棒祭祀も、当初のみ顕在化するものの、集落の安定期には消滅してしまうのである。むしろ顕著なのは、集落内部でも、集落間でも指摘しうる「等質性」である。

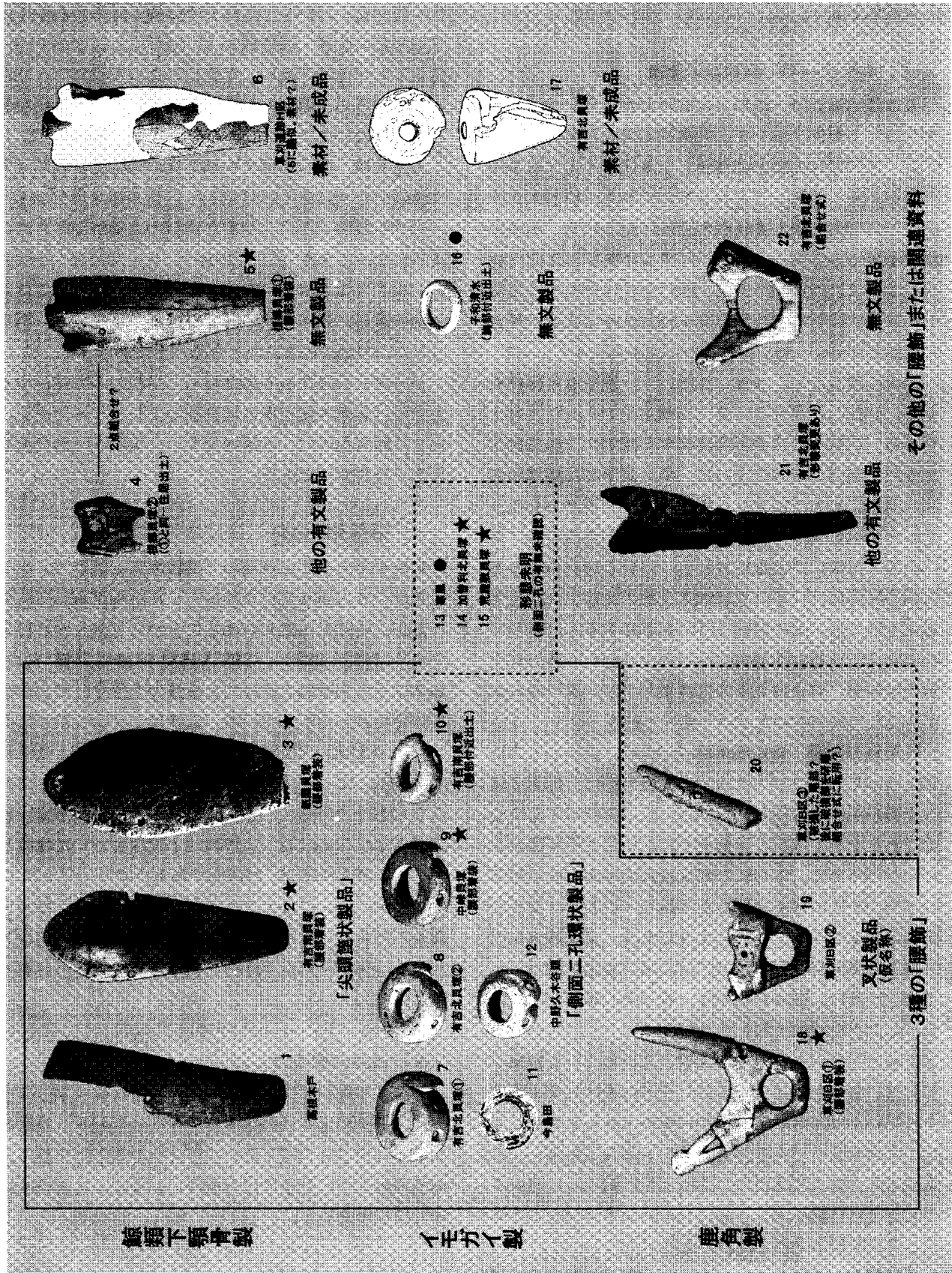
(8) 廃屋墓の問題

著名な市川市姥山貝塚の「接續溝第1号堅穴」出土人骨は、5人同時死亡を前提とした議論が重ねられてきたが、時間差が認められることから見直しが必要とされる(渡辺2006)。市原市草刈B516住居跡では、6体以上の埋葬骨に伴って、多量の土器片、貝、魚骨、鳥獣骨などが出土している。獣骨はイノシシが少なくとも33体分入っており、埋葬された人たちが、次の世代の成員によって特別視されていたことは明らかであろう(西野2004b)。また、中期の埋葬事例が拠点集落成立期から前半期(加曾利EI式期まで)に集中し、とくに多数遺体埋葬に特徴的である。

廃屋墓については、これまで数多くの分析・検討と議論が行われてきたが、中期集落群成立期の特別な人たちが主体であった可能性を含め、再度検討が必要ではないか。

(9) 流通の構造

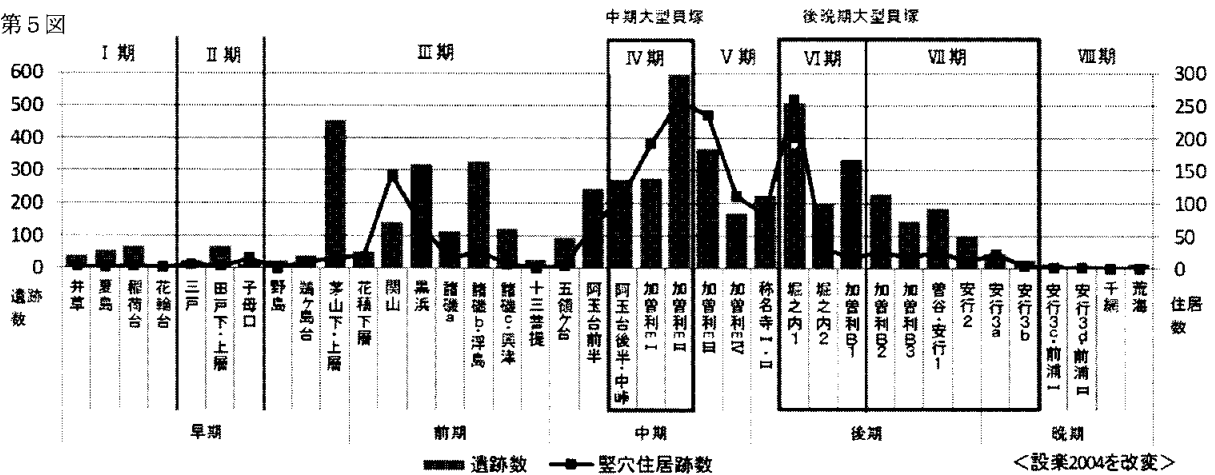
かつて加曾利が描いた遠隔地との流通は一端破棄すべき。隣接地に非貝塚集落群が存在しており、日常的な流通はそこの間を第一に考える必要が出てきた。地域遺跡群内の分布構造の検討が必要だが、本格的な研究は皆無である。



★ 成人人骨腰部着装 (3・15は性別未確定 他は男性)

● 成人男性人骨着装

第5図



4 中期大型貝塚消滅・後晩期大型貝塚成立

(1) 終焉に至る経緯

中期中葉の集落の大きな特徴は集中居住が発達することである。この特徴は、加曾利E I 式期までに顕著である。拠点集落では環状構造の遺構帯のなかに大半の住居跡が含まれ、人口の集中度はきわめて高かったと推定される。分散の傾向が現れるのは、加曾利E I 式の後半で、E II 式期に顕著となる。拠点集落では、環状の遺構帯に多くの住居跡が集中することは変わらないが、外にも住居跡が形成されるようになる。また、拠点集落に隣接して比較的規模の大きな集落群が形成され、広域でみても集落・人口の増加現象とみることができるとも考えられる。このことは、遺跡と住居跡数の変化のグラフにも表れている。とくに、大型貝塚群に隣接する村田川上流・中流域（千葉市南東部・市原市北東部）の谷奥部には、中期大型貝塚の消滅期を挟んだところの、加曾利E II 式とE III 式に跨る小規模な集落が多い。そして大型貝塚がすべて消滅すると、そこは非居住域となり、隣接地に小規模な集落群を形成する。検出された住居跡の数は減少する（第5図。設案2004の表を一部改変して図化。阿玉台式を2時期に分け、遺跡・住居数はそれぞれ1/2とした）が、大規模な人口減は想定できない。かつての拠点集落の故地をあえて避け、その周辺に居住したとみられる。

つまり、大型貝塚群の内部で居住地の拡散減少がはじまり、同時に大型貝塚群の隣接地に分散居住型の集落が現れ、やがて人口が流出して消滅に至ったものと考えられる。

一方、大型貝塚はほぼE III 式古段階の土器（横位連繫弧線文系・意匠充填系）を受け入れずに消滅している。有吉北貝塚の北斜面貝層に顕著なように、最終段

階の土器はきわめて多く、二つの現象の年代は重なっていた可能性が高い。伝統的な集落で、新しい系統の土器を受容しなかった可能性であり、今後詳細な土器の検討によって証明する必要がある。

(2) 中期後葉の集落

別添をみると、一見中期中葉と似ているようだが、それまで空白となっていたところにも分布が拡大し、東京湾沿岸の矢切低地から小櫃川・矢那川低地まで大きく途切れることなく広がっている。貝層はすべて遺構内貝層となり、骨が検出される例は稀である。船橋市新山遺跡群と、千葉市若葉区餅ヶ崎遺跡はこの時期を代表する大規模な集落群であるが、やはり骨はほとんど混じらない。中期中葉に大型貝塚が集中した2か所の河口干潟は縮小し、東京湾沿岸に延々と続く出入りの少ない干潟を形成したものと考えられる。生産性の高い河口干潟が失われたことは、貝類と小魚の安定した入手には痛手となったであろう。

ただし、加曾利E IV 期から称名寺式期にかけて、いくつかの集落で次のVI期に繋がる様相が現れる。その例として、市川市権現原貝塚、船橋市宮本台貝塚、千葉市六通貝塚、市原市武士遺跡、横芝町中台貝塚を挙げることができる。一部加曾利E IV 式に始まるが、遺構の大半は後期初頭のものである。なお、内陸部には、千葉市内野遺跡や市原市武士遺跡のような、加曾利E 式後半から後期に継続する遺跡が見られ、沿岸部とは異なっている。

(3) 後晩期大型貝塚の成立

後晩期大型貝塚の成立期は、後期初頭・称名寺式土器を受け入れた時期からといえる。しかし、称名寺式の後半に遺構の断絶期がある。千葉市六通貝塚では、称名寺式古段階の遺構数はかなり見込まれ、貝層を形成し、貝層には魚骨も含まれている。人の埋葬も認め

低地の野田市東金野井貝塚や、印旛沼低地の八千代市佐山貝塚など汽水産のヤマトシジミを利用しはじめることも一つの特徴であるが、大型貝塚を形成した主要貝種はイボキサゴ・ハマグリ・オキアサリの3種といえる。真間川低地と都川低地以南では、イボキサゴが圧倒的に多い。この地域の貝層がきわだって大きいのは、本種の利用によるものといえるであろう。

Ⅶ期：後期中葉から晩期前半 貝塚数はかなり減少する。東京湾沿岸の各水系で核となる一部の遺跡のみが前時期から継続しており、貝層を形成する遺跡はこのような拠点集落にほぼ限られる。遺跡ごとにみると、廃棄される貝の量は激減し、貝殻は明らかに大きくなる。一方、獣骨の増加が顕著となり、松戸市貝ノ花貝塚、千葉市緑区六通貝塚、横芝町山武姥山貝塚等には獣骨のとくに集中する地点が存在した。汽水産のヤマトシジミの利用が拡大したこともこの時期の特徴である。古鬼怒湾沿岸では印旛沼手賀沼・長沼を見下ろす台地縁辺にヤマトシジミ主体の貝塚が分布する。一方で、印旛沼水系の奥部には東京湾沿岸から分水界を越えて運ばれた貝が多いことがわかってきた。奥東京湾沿岸域もヤマトシジミ主体となる。

Ⅷ期：晩期後半 V期ないしVI期に現れた大規模な拠点集落は晩期前半で消滅し、晩期後半はほとんど集落や貝塚がみられなくなる。東京湾沿岸の魚貝類を重視した生業・文化は終焉を迎えた。しかし、長沼低地の成田市荒海貝塚のみは集落も貝塚もVI期以来継続した。また、周辺にも貝塚を伴う集落が現れる。

(2) 後晩期大型貝塚の衰退

中期大型貝塚がまさに消滅したのに対して、後晩期大型貝塚の衰退は単純ではない。後期前葉に連綿と分布した大型貝塚は、後期中葉・加曾利B2式期ころには半数以上が消滅し、残った貝塚でも、後期後葉までには貝類資源の利用が低調となる。貝塚数の減少は、とくに貝塚発達の中心といえる真間川低地から都川・村田川低地までの範囲で著しい。注目されるのは、この段階以降に残る集落は、後期初頭にいち早く出現した各地域の拠点的な性格のつよい集落がほとんどであり、いずれも晩期安行式後半・前浦式期前後まで継続することである。これらの集落の継続期間は後期前葉から晩期前半まで、きわめて長期にわたる。

したがって、大型貝塚が晩期に消滅したという表現は正確ではなく、①大きな面期は後期中葉～後葉にあり、②貝塚の減少は、集落自体の減少に伴うものである、ということが出来る。なお、東京湾沿岸の拠点集落が減少する時期には、隣接する古鬼怒湾水系の印旛

沼周辺に拠点集落が増加し、分布密度は東京湾沿岸を上回るようになる。汽水産のヤマトシジミを主体として、海水産貝類も混じる貝塚を伴う集落が多い。

東京湾東岸の集落において貝類資源の利用が低調になった要因については、土器製塩の開始によって干し貝の価値が低くなったという見方があった（後藤1973）。しかし、土器製塩の開始は後期後葉のことであって、貝類資源利用の変化の直接的な要因とは考えにくい（鈴木・渡辺1976）。ただし、結晶塩ではなくとも塩分の高度な利用が関係した可能性も考える。阿部芳郎・黒住耐二らが進めている製塩の研究動向が注目される。

(3) 大型貝塚衰退の要因

西広貝塚の動物質食材の変化を概観して気づくのは、貝層の形成が衰退する時期にも、変化は少なく緩やかであることである。後期前葉から晩期前半まで、拠点集落の形成期間を通じて、生産活動の内容に継続性を伺うことができる。つまり、この時期の変化は、各拠点集落内部での変化にほかならず、長期にわたる集落間の社会関係が維持されるなかで、集落ごとの個性を増す方向に向かったものと考えられる。大型貝塚の衰退の要因は、現在のところ明確でないが、今後検討すべき候補を挙げておく。

- ・狩猟活動の活発化。シカ等陸獣への依存度が高くなり、相対的に海産資源への依存度が低くなった。
- ・食材としての陸獣への志向が高まり、相対的に貝類・小魚への志向が低くなった可能性。
- ・土器製塩の開始以前から、塩分の高度な利用が行われていた可能性。日常的に安定して塩分やうまみを利用できるという貝類・小魚の価値が相対的に低くなった。
- ・寒冷化によって、丘陵部から台地部へのシカの生息分布が遷移し、資源量が増大した可能性。
- ・大型貝塚衰退の傾向が始まる加曾利B2式期には、遺跡分布が大きく変化し、低地の共同作業場が現れるなど、生産・居住システム全体が大きく変化した可能性が高い。

(4) 内陸への貝類の流通

印旛沼水系の後期集落に、東京湾産の貝類が流通していたことは、古くから指摘があり（金子・川戸他1961、堀越1983）、阿部芳郎らによる一連の研究がある（阿部1994、阿部・建石他2000など）。

(5) 人骨集積の存在と消滅

多数の遺体が土坑内等に集積される特異な合葬事例が、東京湾東岸域を分布の中心として、縄文時代後期初頭～前葉の一定時期に集中する。渡辺新は、市川市権現原遺跡の人骨の分析によって、二つの土坑群に埋葬された人骨を一つの場所に集めたと分析した（渡辺1991）。また、各事例の間には脈絡が認められ、一連の墓制として変遷を予察することができるが、合葬の形態には、遺体状況が解剖学的自然位にある／ない、埋葬施設の規模が一次葬可能／不可能、といった別があることを指摘し、初期の事例である権現原貝塚例は、南関東西部の集団と東部の集団が合流し、共に集落を運営したことによるものとみた（1994）。山田康弘も同様の見解から、一連の葬制は小規模集落が集まって大規模集落を形成した時に遺骨を持ち寄って作ったモニュメントであり、祖先祭祀の現れとみた（1995）。渡辺は、最近の松戸市牧之内遺跡の発掘例をもとに、古作貝塚例を再検討し、初葬地を見出し、市原市祇園原貝塚とは性構成が著しく異なることを指摘している（渡辺2015）。

6 中期大型貝塚群の生産様式

中期と後晩期の資源利用をみる。まず、県内全体の概要を別添5に示す。つぎに、中期と後晩期の分析例を取り上げる。

中期大型貝塚の代表例として千葉市有吉北貝塚の分析結果を取り上げる。集落と斜面貝層の4分の3ほどを調査した成果である（別添6）。

（1）水産資源の利用

貝類 イボキサゴ（86%）とハマグリ（9%）が圧倒的に多い。イボキサゴは小さな巻貝で、とくにこの貝塚のものは平均径13.1mmとごく小さい。肉量はごく小さく、大量に身を取り出して利用するのは効率が悪すぎる。本種が東京湾沿岸の大形貝塚の最重要種であったことを理解するためには、身が小さく取り出しにくい欠点を上回る何らかの価値とか、あるいは身を取り出さずに利用する方法を想定する必要があると思われる。ハマグリも小形主体であり、同様である。

周年にわたる日常的な漁 貝殻成長線分析によるハマグリ死亡季節みると、春から冬にかけて徐々に少なくなるものの、一年中採取されていることがわかった。殻長31.5mmくらい、年齢でいうと1歳から1.5歳の若い個体为中心で、大きさがきわめて良くそろっている。大きさが一定であるのは、毎年途切れなく継続的に一おそらくは日常的に一活発な漁が行われた証拠といえる。

魚類 安定的に捕獲された魚はイワシ類、小形のハゼ、小ガレイ、小アジ、サヨリといった小魚。エイ・サメ類や、コチ、クロダイ、スズキの成魚など、やや大きめの魚も混じるが、河口まで入る種類に限られ、小魚に比べるとずっと少ない。魚骨ほどの貝層にも入っていて比較的变化が少ないことから、漁は頻繁に、おそらく日常的に行われたようである。湾奥・河口の干潟～浅瀬で、河口に集まる雑多な魚を網でまとめて捕っていたものと推定される。

魚網錘からみた漁撈形態 魚網錘は集落全体からまんべんなく約5,300点出土した。「土器片錘」と呼ばれる土器のかけらに切り込みを入れてリサイクルしたものである。土器片錘は当時の漁場と推定される低湿地遺跡からもたくさん見ついている。魚網錘が海岸から離れた集落遺跡からたくさん出土することから、魚を絡めたまま集落に持ち帰るタイプの小形の網を想定できそうである。

資源管理の証拠 二枚貝の計測値をみると、貝漁が活発になる時期には採取圧によって貝が小型化している。しかし、1歳未満の幼貝の採取は意識的に避けていたらしい。集落後半期（加曽利EⅡ期）にはイボキサゴ漁で混獲した幼貝をもリリースしたことが、計測値分布に表れている。資源の減少が深刻になった時期に、資源管理の意識が高まったものらしい。

水産資源利用の特徴 イボキサゴ漁、ハマグリ漁、小魚の網漁を河口付近の干潟・浅瀬で盛んに行っていたものと推定される。河口域は、内湾でもとくに生物量が大きく生産性が高い。栄養塩が上流から流れ込み、沿岸流による流失が少ないからである。年間を通して、毎日のように鮮度の良い動物質の食材が得られることに魚貝類の大きな価値があったものと考えられる。

（2）森林資源の利用

鳥獣類 鳥獣骨も少なくない。早前期や中期後葉などの貝層中にほとんど骨が混じらない時期との差は歴然としている。後期後葉から晩期前半の貝塚にみられるような極端な骨の集中箇所は存在せず、後晩期に比べると全体の量も少ないが、集落内のどの貝層にもある程度骨が入っているのが特徴といえる。

狩猟用具である石鏃が1,019点と多数出土しており、黒曜石による石鏃製作に関わる剥片・細片類が多数出土していることも、狩猟の重要性を物語る。石鏃の使用は、神津島産黒曜石が安定的な流通に支えられていたとみられる。食材として重要であったと考えられるのは、イノシシ、シカ、タヌキ、ノウサギ・ガン・カモ科、キジ等である。イノシシは幼・若獣の割合が高

く、一時的な飼育を行った可能性がある。

植物 遺跡付近の低湿地で行われた植生分析から、遺跡付近には落葉広葉樹林、いわゆるナラ林が形成されていたと推定されている。コナラ亜属のうち、コナラやクヌギの堅果は収穫量が多く、水さらしとアク抜きを行えば良質で栄養価の高いデンプンを得ることができる。ナラ林にはクリ、オニグルミが伴うのが一般的で、実際に貝サンプルからは炭化したクルミの内果皮が多出する。クリは多くない。いまのところ、当遺跡の縄文人が利用した堅果類の候補としてコナラ・クヌギ・オニグルミをあげることができる。

次に遺構・遺物からみると、当遺跡では「中央広場」を囲むように 580 基の小竪穴が検出されている。フラスコ状に掘り込み、蓋をするタイプから、中心に柱を立て簡単な屋根を掛けたものへと変化したようであり、繰り返し掘り込まれて夥しく重複している。小竪穴の主な用途は、秋にまとめて収穫された堅果類の貯蔵であったと考えられている。また、堅果類の製粉（粒）具とされる磨石類が 911 点出土しており、石皿等には殻割り用とされる窪みが多数みられる。これらは、堅果類が重要な食材であったことを物語る。一方、打製石斧も 820 点出土しており、ジネンジョ等の根茎類も重要であった可能性が高い。

（3）生業の割合

石器組成 今村啓爾は、打製石斧・磨石類・石鏃の個数比を中期中葉の関東広域で比較する方法によって、根茎類：堅果類：鳥獣類の利用度に明瞭な地域差が認められることを明らかにした（今村 1989）。西関東・中部高地では打製石斧が圧倒的に多く、石器の総数も多い。これに対して茨城県は石器が少なく、磨石類に偏っている。千葉県について、同様の方法で資料を追加したところ、当遺跡をはじめとした東京湾沿岸地域では、例外なく 3 種類が同程度出土していることから、根茎類・堅果類・鳥獣類のいずれも利用していて、いずれかに偏らないあり方を想定することができる。打製石斧と磨石類は、中期中葉に増加し安定する。植物採集・加工活動の活発化・安定化は、大型貝塚の形成に象徴される魚貝類の活発な利用と期を一にしている。

人骨の食性分析 炭素・窒素安定同位体比による人骨の食性分析によって、全国の縄文人はきわめて多様な食性をもっていたことが明らかになった。そのなかで、東京湾東岸の大型貝塚出土人骨のデータは、植物等の陸産資源に強く依存したグループと、大型魚や海獣類などの水産資源に強く依存したグループの中間に入る。当遺跡から出土した 8 個体の人骨についても同

様である。注目すべきは、陸産資源と水産資源をバランスよく活かしたグループに入るのは、中・後期の大型貝塚の縄文人である点である。他方で、関東の縄文人のなかでも前期や晩期、あるいは中・後期のなかでも大型貝塚を形成しない加曾利 E III 式から称名寺式期の個体では、植物側や水産資源側に偏った食性を示す傾向がある。大型貝塚を残した人たちの食性が魚貝類に偏らず、植物質食材の利用も活発であったことが、縄文人の遺体自身から裏付けられたことの意義は大きい。画期的な分析方法、研究成果ということができる。

（4）通年定住を支えた食

当集落の縄文人は、堅果類や根茎類、イノシシ・シカ・タヌキ・ノウサギを中心とした森林資源、小魚・イボキサゴ・ハマグリを中心とした水産資源など、あらゆる食材をバランスよく活かしていたらしい。そのうち、貝類ではイボキサゴとハマグリ、堅果類ではコナラ、根茎類ではおそらくイモ類など、計画的に安定して得られるいくつかの食材につよく依存していた可能性が高い。決して貝類に偏ってはならず、漁撈の活発化とともに、植物質食材の利用も盛んになったものと考えられる。

イボキサゴ、ハマグリ、小魚は一年中安定して入手できるが栄養価は高くない。一方、ドングリやイモ類は栄養価が高いが、ヒトにとってそれだけでは決して食べやすい食材ではない。この相互の利点・欠点を補うかたちで貝類・小魚漁と植物食が拡大したものと思われる。塩分やうまみがあるからこそ、植物をたくさん食べることができるようになったのであろう。ドングリやイモ類を中心とした食事をより美味しくしようとして、結果的に多くの食材を生かした栄養のバランスのとれた食を得ていったものと思われる。中期中葉の長期にわたる通年定住・集中居住を支えたのは、集落周辺と東側の広大な森林と、集落から日常的に行き来できる河口干潟から得られる食材であった。主要な食材が通年にわたって計画的に利用できたことが、定住型の居住を可能にしたものとする。

（5）加工場型貝塚との比較

「加工場型貝塚」の事例

東京湾沿岸では、各期の「加工場型貝塚」が見つかっている。早・前期の千葉市神門遺跡、前期後葉～中期中葉の千葉市宝導寺台貝塚、中期の東京都北区中里貝塚・市原市実信貝塚、後期前葉の東京都港区伊皿子貝塚、市川市イゴ塚遺跡、後期中葉の市川市奉免安楽寺遺跡などがある。出土遺物や貝層の内容はかなり多

様であり、貝類の加工に特化した場所と、居住地の可能性も含めて多様な活動が行われた可能性のある場所が存在する(植月 2001)。しかし、居住施設や貝類以外の遺物が少なく、貝類の種組成や大きさなど、どの指標から見ても東京湾東岸の大型貝塚との違いは明確である(資料)。後期に増加するのは、前述した資源利用の多様化や集落間の分業化による可能性が高い。後期後葉以降の事例は知られておらず、貝類資源の利用が低調になったという見方に調和的である。

中里貝塚 貝層中には人工遺物や他の動物遺体がほとんど含まれず、マガキとハマグリの大いなる個体が大半を占める。ハマグリは採取季節は春から初夏の短期間に集中している。あらゆる点で、東京湾東岸の大型貝塚のあり方とは対照的であり、二枚貝の剥き身・干し貝生産に特化した加工場型貝塚の典型例とみられる(樋泉・保坂・山谷 2000、阿部 2000)。中里貝塚で生産された干し貝の生産者の集落や流通範囲は今のところ明らかでない。沿岸部の漁業集団と内陸部の狩猟・採集集団が分業体制を敷き、両者間で食糧物資を交換した可能性(樋泉 1999)や、丘陵部に発達した集落群が季節的に共同利用した可能性等が考えられる。

東京湾西岸の武蔵野台地と相模野台地の水系は、すべて水源を丘陵部にもち、東岸に比べて河床勾配が大きく、河川流速も速かったと推定される。そのような河川では、丸木舟によって台地上の居住地に戻ることが難しく、運搬コストが高くなるため、日常的な海産資源の利用には適していなかったものと推定される。季節的にまとめて剥き身・干し貝生産を行う形の貝類資源利用は、こうした条件下で豊富な貝類資源を活用するために適応したものであったと考えられる。

未知の「加工場型貝塚」の存在の可能性 千葉県内には、海岸の人工化が進む以前の旧海岸線付近に、縄文時代以降のものと思われる時期不明の貝層が、多数存在するようである。東京湾沿岸の縄文時代の海岸線付近を線的に試掘調査したときにも、縄文時代のものとみられる貝殻を含む層はいたるところに存在し、土器片錘がまとまって見つかった地点もいくつもあった。しかし、いわゆる「自然貝層」と「貝塚」の区別は、発掘調査を行った場合でも判断が難しい。旧海岸線付近や埋没谷の「自然貝層」は「貝塚」の可能性を検討する必要があるが、現実的には対策がなされていない。

(6) 大型貝塚=干し貝加工場説の再検討

鈴木正博らは、後藤が大型貝塚の消滅を製塩の開始によるとしたことに疑問を呈し、むしろ、「東京湾東岸地帯における後～晩期の海退現象」によって「貝類

の採集が不可能になったと考える方がより自然ではないだろうか」「海退現象にあわせて、海を追いかけるよりも、それまでに培われてきた狩猟技術により大きな発展をみせたのが馬蹄型貝塚消滅後の時期なのであろう。」とした(鈴木・渡辺 1976)。今井公子は、「中央凹地」が晩期に至るまで清潔に維持されてきたとみられることを取り上げ、干し貝加工の作業場であったなら、長年にわたって清潔に維持することは困難であろうとした。また、イボキサゴや小形ハマグリで干貝の余剰生産が可能であったらどうかと疑問を呈した。さらに、漁場との距離の問題や多量のキサゴ純(粉碎)貝層の問題も、必ずしも研究者の首肯するところではないとしている(今井 1982)。

筆者は、有吉北貝塚の分析結果から、少なくとも中期中葉の大型貝塚のあり方は、干し貝加工場説に合わないと考えた。年間を通して、日常的に鮮度の良い動物質の食材が得られることに、当地域の魚貝類資源の大きな価値があったとみて、植物質食材を使った鍋料理が日常化したことに伴って、うまみや塩味を加える調味食材として貝の需要が高まったことが大型貝塚形成の理由という仮説を提示した(西野 2005b)。

- ・大型貝塚を形成した人々は様々な食材を活かしており、生業や食は貝類に偏っていない。
- ・大型貝塚の貝層の最重要種であるイボキサゴは、きわめて小さく、身を取り出して干し貝を作るのはきわめて効率が悪い。
- ・貝層の形成状態と貝殻成長線分析による死亡季節推定から、貝類の利用は集中的な利用でなく、通年にわたって日常的な利用を想定できる。
- ・後藤が想定した東京湾沿岸の干し貝と内陸の石器石材の交換は認めがたい(阿部 2000)。

7 後晩期大型貝塚群の生産様式

(1) 後晩期大型貝塚の様相

後晩期大型貝塚の全貌を知り得る初めての成果である西広貝塚を取り上げ、中期末葉～晩期前半の生産活動の時期的な変化をみていきたい。後晩期大型貝塚形成期の動物資源利用は多様性が高いため、1遺跡の分析例を一般化することはできないが、西広貝塚の貝層部分の分析データ(鶴岡・忍澤他 2008)から、この遺跡の貝類・魚類・鳥類・哺乳類利用の時期的な変化をみてみたい(別添8)。

貝類資源の利用 貝類資源の利用が低調傾向に入る後期中葉以降は、引き続き貝層を形成する集落でも、貝層の規模が縮小する傾向にある。確実に晩期

に帰属する貝層が見つからない集落もあり、西広貝塚は比較的活発に採取されている部類に入るのであろう。貝類はイボキサゴが個体数で約8割を占め、ハマグリが1割程度を占める。晩期貝層のハマグリはかなり大きいので、発掘時の印象では貝種組成もハマグリ主体に変化したようにみられていたが、以上のように貝種組成の時期的な変化は小さい。漁の頻度や採取量が減っても、漁の形態は長期にわたって維持された可能性が高い。

ただし、ハマグリサイズの变化はかなり大きい(資料)。当初は殻長の平均が40mmほどあり、かなり大きな個体も採取されていたが、漁が活発になる後期前葉では、平均が34mmとかなり小さくなり、大きさが揃っている。やや漁が少なくなる後期中葉には、平均が当初のレベルに戻り、晩期では40mmを超えるものを中心として、70mmを超えるものも多く混じる。

最近発掘調査を実施した千葉市園生貝塚では、晩期でも大規模な貝層を形成しているなど、遺跡間の差が大きいことが大きな特徴といえる。一方、印旛沼周辺ではヤマトシジミ主体の貝層を形成する集落が増加するとともに、東京湾産の海産貝類も多量に流通している。貝種組成の比較から、海産貝類が高率でみられる八木原貝塚を基点とした流通が想定されている(阿部・建石他 2000)。樹枝状に広域を連絡する丸木舟による内水面交通の発達と、谷の分水嶺を越えた陸上交通の発達の両面を考慮する必要があるだろう。

魚類・哺乳類の利用 大型貝塚の形成期の貝層には、どこを掘ってもある程度雑多な魚骨が入るのが特徴である。河口や沿岸浅瀬に入る魚種を捕獲する網漁は、短時間で可能なイボキサゴ漁・小形ハマグリ漁と一体となる活動であったと考えられる。西広貝塚のデータをみると、魚類の出土量は後期前葉に急増し、その後徐々に減少している(資料)。後期後葉は貝層の分析量が少ないので、実際には晩期に至ってさらに激減した可能性が高い。魚種組成は時期的な変化が小さいが、晩期のグラフに若干の違いが認められる。減少した魚種をみるとイワシ類・アジ科・キス属・ボラ科と表層魚(浮魚)が多く、相対的にエイ・サメ類、コチ属という底層魚(底魚)が増加している。また、淡水魚も増加している(資料)。同遺跡では189点のヤス状刺突具が出土しているが、貝層の調査規模からみると晩期に出土数が増えている。これは底層魚が増える現象と、狩猟活動の活発化に伴って骨・角素材が入手しやすくなったことに関連するとみられている(金子・鶴岡 2007)。

哺乳類は、晩期に出土量が急増することが大きな特

徴である(資料)。種組成をみると、後期後葉以降、シカ・イノシシ以外が少なくなり、とくにシカの割合が高まる(資料)。後期後葉～晩期に獣骨が増加することは古くから知られ、獣骨が層状をなすものは「骨塚」などと呼ばれてきた。六通貝塚、山武姥山貝塚などの事例を挙げることができる。シカ・イノシシが大半で小動物や魚類がごく少ないことが共通する特徴であり、後期後葉～晩期に中・大形獣の狩猟活動が盛んになったことを物語る。

動物質食材利用の変化 貝類採取活動が低調になり、狩猟活動が活発化する傾向は、後期中葉・加曾利B2式ころに顕在化し、晩期に顕著となったことは間違いないところである。後期前葉には東京湾内湾部の広域で貝類が活発に利用されたが、後期後葉～晩期前半には、遺跡間で貝類資源の利用に大きな差ができた。その要因が、貝類資源の減少にあった可能性は否定できないが、冷涼化や過剰な採取によって東京湾の貝類資源が枯渇するようなことは想定できない。貝層の形成が低調になっても貝種組成に変化が少ないのは、変化の主要因が貝類資源の量ではないとの見方を支持する。資源利用形態が多様化するなか、相対的に貝類の利用が低調になったと解釈すべきであろう。

(2) 都川・村田川貝塚群内の比較

中期大型貝塚形成期(IV期)の様相は、どの集落・貝塚も齊一的であったのに対して、この時期では集落・貝塚間でさまざまな差がみられる。分布・立地をみると、海岸線付近から内陸部まで幅広く存在し、分水界を超えた古鬼怒湾水系の谷にも大量の貝が運ばれている。一水系の集落群間で比較を試みた都川・村田川貝塚群の分析成果(樋泉・西野 1999、樋泉 2003・2013など)をみてみたい。

当時の海岸からある程度の範囲内にある集落では海産魚が選択的に利用されるが、海岸から遠ざかるにつれて利用頻度や魚種の多様性が低くなり、もっとも遠い菅田高田貝塚では淡水魚主体であった。貝類は菅田高田貝塚のような内陸部の集落であっても大量に運び込まれている。シカ・イノシシは各集落で活発に行われたと推定されるが、一般的な生息密度を考慮すれば、各集落が狭い猟場を有していたと見るよりは、共同利用地としての猟場をもつ形や、複数集落の成員が合同して狩猟グループを構成するなどの協業形態を想定する方が、無理がないと思われる。貝殻成長線分析によるハマグリ採取季節推定の結果は、いずれも周年に渡るものの、矢作貝塚は春中心型、加曾利南は周年型、木戸作貝塚は秋・冬中心型と、季節分布は大き

第3表 都川・村田川水系の後期貝塚群における資源利用の比較

都川・村田川水系の後期貝塚群における資源利用状況の比較

	矢作貝塚	台門貝塚	加曾利南貝塚	多都田貝塚	菅田高田貝塚	木戸作貝塚	大膳野南貝塚
分析試料の時期	後期前葉	後期前葉	後期前葉～中葉		後期中葉	後期前葉	後期前葉
遺跡の位置	都川河口	都川下流支谷奥	都川中流支谷奥	都川中流支谷奥	都川谷奥	村田川下流支谷奥	村田川下流支谷奥
海岸からの直線距離	約1km	約2km	約4km	約6km	約6km	約2km	約4km
谷沿いの距離	約1km	約2km	約6.5km	約7.5km	約12km	約2.5km	約5km
層							
貝層の規模	中	大	大	大	中	中	中
主要動物質食料の構成	貝+海産魚+陸獣(魚多)	貝+海産魚(+陸獣)	貝+海産魚+陸獣	貝+海産魚+陸獣(大形魚種)	貝+陸獣+淡水魚	貝+海産魚+陸獣(陸獣、大型魚少)	貝+海産魚+陸獣(陸獣、大型魚少)
貝種組成	海産 イボキサゴ、ハマグリ 主体	イボキサゴ、ハマグリ 主体	キサゴ、ハマグリ主、 シオフキ・アサリ多	イボキサゴ、ハマグリ が大半を占める	イボキサゴ、ハマグリ が大半を占める	イボキサゴ、ハマグリ が大半を占める	イボキサゴ、ハマグリ が大半を占める
汽水産	多い	ふつう	ふつう	なし	ごく稀	少	ごく稀
ハマグリ採取季節	周年(春中心)	—	周年(夏と冬やや多い)	—	周年(夏中心?)	周年(秋～冬中心)	周年(秋～冬中心)
魚種組成	海産大型 クロダイ、マダイ主 体。スズキ多い	(詳細不明)	クロダイが大半を占 める	稀	稀	クロダイ主体、スズ キ・マダイ多い	クロダイ主体、スズ キ・マダイ多い
海産小型	多様な種が混在	—	多様な種が混在	少ない	少ない	多様な種が混在	多様な種が混在
淡水産	稀	—	稀?	稀	フナ主体	稀	稀
鳥獣類組成	陸獣類 シカ・イノシシ主体 (シカが多い)	(詳細不明)	シカ・イノシシ主体	シカ・イノシシ主体	シカ・イノシシ主体 (シカが多い)	シカ・イノシシ主体 (シカが多い)	シカ・イノシシ主体 (シカが多い)
鳥類	カモ類主体、キジ多 い	稀	キジ主体、カモ類多 い	稀	?	?	?
ウミガメ	あり	なし	(加工品)	なし	なし	(加工品)	(加工品)
生産用具	狩猟具 石鏃	—	石鏃(少ない)	石鏃(少ない)	石鏃(少ない)	なし	なし
漁撈具	釣針・刺突具多い、 鏃	—	刺突具、鏃	鏃(稀)	刺突具、鏃	刺突具、鏃(稀)	刺突具、鏃(稀)
植物採集・加工	打製石斧、磨石、石 皿	—	打製石斧、磨石、石 皿	打製石斧、磨石、石 皿	打製石斧、磨石、石 皿	打製石斧、磨石、石 皿	打製石斧、磨石、石 皿
生産用具組成の特徴	漁撈具(刺突具・釣 針)多い	(詳細不明)	植物採集・加工具が 大半を占める	植物採集・加工具が 大半を占める	植物採集・加工具が 大半を占める	植物採集・加工具が 大半を占める	植物採集・加工具が 大半を占める

く異なっていた。

各集落の分析から、生業がもっとも活発になる季節は、沿岸部に立地しマダイ漁を活発に行っていた矢作貝塚は、マダイの回遊する春から夏、堅果類の加工具が多く魚類・哺乳類遺体の少ない木戸作貝塚は堅果類の採集が行われる秋と推定される。加曾利南貝塚では動物遺体や生産用具の組成から漁撈・狩猟・採集をバランスよく組み合わせた構成から周年と推定される。これは、ハマグリ採取季節とよく一致している。樋泉は、この解釈として、集落ネットワークに所属するメンバーの一部が、季節ごとの生業の状況に応じて集落間を移動する柔軟な生産・居住システムを想定した。

8 まとめ 大型貝塚の消滅と再編の動向

中期中葉の大型貝塚群は、東京湾湾奥の最奥部に河口干潟を形成した二つの地域に成立した。多角的な資源利用に有利な、もっとも条件のよい場所に、斉一性の高い定住型・集中居住型の集落が形成された。このような占地と資源利用は、結果として、河口干潟の縮小等の環境の変化に対して、弱い側面をもっていたものと思われ、次第に周辺の小規模集落に人口が流出しつつ、ほぼ同時に消滅したものと推定された。

中期後葉には、遊動性の高い分散居住型の集落が広

域に分布した。人口の激減は想定できず、中期大型貝塚の消滅は、地域内での生産・居住様式の変化という現象であったと考えられる。

後期前葉までに成立した後晩期大型貝塚は、中期大型貝塚の要素を引き継いだ部分が多いものの、各集落が多様性もち、分業や協業を行うことでより広域にわたる社会を実現したのではないか。中期の環境の変化に弱いあり方を克服したとみることができるかもしれない。

以上の見通しは、検証不足を承知であえて提示したものである。どの検討も中途半端なものであり、きわめて多くの研究課題が残されている。加曾利貝塚は、東京湾沿岸の大型貝塚の成立から消滅にいたる動向を単独で検討し得る唯一の存在として、明確な目的と計画性をもった発掘調査が行われる意義はとて大きいと考えられる。その一方で、県内には未整理の貝塚資料がきわめて多い。これまでのつげが非常に多いことも忘れてはならない。

県内では、進行中の整理・分析や、今後計画されているものもすでに多数ある。スタッフは限られており、所属を超えて年次計画をつくって対処を始めたところである。唯一の貝塚専門の博物館として、こうした機能を果たし、成果を積み上げていく場所を目指すべきであろう。